

公益財団法人日本バスケットボール協会
2013（平成25）年度 事業報告

I 事業の概況

2013年9月、2020年オリンピック・パラリンピックの東京開催が決定するというスポーツ界のみならず日本にとって非常に大きなニュースがもたらされ、2020年の東京オリンピックおよびそれ以後を焦点とした検討のスタートが切られた。

男子日本代表においては、2014年のワールドカップ出場を目指して臨んだFIBA ASIA選手権大会であったが、9位という結果に終わった。この結果および2020年オリンピック開催決定を受け、男子強化についての中長期的戦略を検討する「男子強化戦略委員会」を設置し、2014年2月に答申を行い、次年度に向けた新体制の構築を進めた。

女子日本代表においては、43年ぶり2回目のアジア制覇を成し遂げ、2014年FIBA女子世界選手権の出場権を獲得することができた。

また、新リーグ運営本部にて準備を進めてきたNBL（National Basketball League）を2013年秋にスタートさせた。さらに、新リーグ方針であったPリーグの設立にあたり、2014年2月に「Pリーグならびにリーグ構造プロジェクト答申」をもとに2016年シーズンからプロリーグを立ち上げることを決定し、取り組みをスタートさせた。

II 事業内容

1. 競技力向上

(1) 男子強化

日本代表チームにおいては、就任2年目となる鈴木貴美一ヘッドコーチのもと、若手育成も念頭に置きながら選手選考を行い2014年ワールドカップ出場（アジア3位以内）を目標として臨んだが、結果は9位で目標には及ばなかった。その後、東京オリンピックの開催決定もあり、7年後のオリンピックを視野に入れた中長期強化戦略、一貫指導体制等について検討するため外部有識者を含めた「男子強化戦略委員会」を設置し、2020年東京オリンピックに向けた男子日本代表活動の指針を策定。次年度に向けた新体制の構築を進めた。

また、U-16カテゴリーでは、アジア3位となり、初のU-17世界選手権の出場権を獲得した。

<主な国際大会と結果>

大会	目標	結果
第3回東アジア選手権大会	FIBAASIA 出場権獲得	3位/7チーム (3勝2敗)
第35回ウィリアム・ジョーンズカップ	—	7位/8チーム (1勝6敗)
第27回FIBAASIA男子選手権大会	3位以内	9位/15チーム (3勝4敗)

第 27 回ユニバーシアード競技大会	決勝 T 進出	18 位 / 24 チーム (2 勝 5 敗)
第 6 回東アジア競技大会	3 位以内	4 位 / 7 チーム (1 勝 3 敗)
第 3 回 FIBA ASIA U-16 男子選手権大会	3 位以内	3 位 / 14 チーム (6 勝 2 敗)

(2) 女子強化

日本代表チームは、2016 年リオデジャネイロオリンピック出場を目指すため、若返りを図り、今年をアジア優勝と定めて強化活動をスタートした。FIBA ASIA 選手権大会では 7 戦全勝での 43 年ぶり 2 回目の優勝を果たし、世界選手権への出場権を獲得した。

アンダーカテゴリーでは、U-19 世界選手権では 8 位、FIBA ASIA U-16 選手権大会では 2 位となり、3 大会連続となる U-17 世界選手権の出場権を獲得した。

<主な国際大会と結果>

大会	目標	結果
第 6 回東アジア競技大会	優勝	2 位 / 5 チーム (3 勝 1 敗)
第 25 回 FIBA ASIA 女子選手権大会	優勝	優勝 / 12 チーム (7 勝 0 敗)
第 27 回ユニバーシアード競技大会	ベスト 8	13 位 / 16 チーム (3 勝 3 敗)
第 10 回 FIBA U-19 女子世界選手権大会	6 位以内	8 位 / 16 チーム (3 勝 6 敗)
第 3 回 FIBA ASIA U-16 女子選手権大会	優勝	2 位 / 12 チーム (6 勝 1 敗)

(3) 選手発掘・育成

カテゴリー別のブロックエンデバー、トップエンデバーを当初計画通り実施し、継続的な選手の発掘・育成を図った。

また、2 年目となる「ジュニアエリートアカデミー」ではトライアウトの導入、シューターの育成など新たな取り組みを行った。

(4) 情報戦略および医・科学サポート

男女日本代表チームや各カテゴリー代表チームの要望に応じて日本代表選手や対戦国の情報収集および分析を行った。

また、医科学においては、代表チームへのチームドクター、トレーナーの派遣、選手の健康管理やデータの蓄積を行った。その他、ジュニアエリートアカデミーにおいても成長段階にある選手の医学サポートを実施した。

2. 競技会（各種大会）の開催

(1) 国際大会

国内で開催する日本代表戦として、男子はフィリピン、女子はモザンビークを招聘し、「東日本大震災復興支援 バスケットボール日本代表国際親善試合 2013 POCARI SWEAT Presents 宮城大会/東京大会」を男女同時開催。各 3 試合を行った。

(2) 国内大会

主催となる全国大会は当初計画通り開催した。尚、ウインターカップは2年ぶりの東京開催となった。

3. 講習会・研修会等の開催

(1) 指導者

2011年度に引き続き、各リーグのコーチ等多くの指導者の資格取得を推進するため、JBA公認B級コーチの専門科目講習会および独自の共通科目講習会を開催した。

また、ブロック別に実施している全国コーチクリニックについては、中国（岡山県）および東北（宮城県）の2会場で開催した。

(2) 審判

上級審判員の養成のための活動の他、国際審判員早期育成プロジェクトを立ち上げ、若手の早期育成を推進した。

また、3x3の推進に付随して各種大会を通じて3x3の審判員の養成にも取り組んだ。

4. 普及

2012年度から開始した「バスケキッズフェスティバル」について、都道府県協会の協力のもと、40都道府県において、全42回開催、小学生、保護者、指導者含め延べ約4,111人が参加した。

5. 企画（マーケティング）事業

ゼビオグループとのエグゼクティブパートナー制度が2年目を迎え、全国ミニ大会ではマーケティングスキームの再構築を行い、前年度を上回る協賛を獲得した。また、ウインターカップにおいてはフジテレビとの提携により、BSでは男女決勝が生中継され、地上波では特別番組が放送された。

6. 国際対応

12月にFIBA事務総長が来日し、男子のトップリーグ、男子強化、JBAの組織運営についての強い指摘を受け、それぞれの課題の解決に向けた取り組みを速やかに進めるとともに、FIBAに対しても今後の取り組みに向けた方針を示した。

7. 広報

日本代表活動や各種全国大会、国際大会等の情報発信および報道対応等を行った。また、JBA公式ホームページのコンテンツの充実、ソーシャルメディアの活用も推進し、特に2012年に開設したLINEアカウントでは年間約4万人のともだちが増加した。

8. 資格認定および登録

審判ライセンス、指導者ライセンスについての認定および登録管理を行った。尚、チー

ム、競技者をはじめとした登録全般については、TeamJBA を利用して管理した。

競技者登録数は 2007 年度以降微減の傾向にあったが、2000 年の個人登録制度導入後最多の 619,823 人となった。

<登録数>

チーム	34,284 チーム 〈前年比 100.4%〉
競技者	619,823 人 〈前年比 101.0%〉
審判	6,898 人 〈前年比 103.7%〉 (内、AA 級 : 84 人、A 級 : 225 人、公認 : 6,589 人)
コーチ	13,174 人 〈前年比 111.5%〉 (内、A 級 : 133 人、B 級 : 347 人、C-1 級 : 102 人、C-2 級 : 4,602 人、 D 級 : 6,776 人、E-1 級 : 762 人、E-2 級 : 452 人)

9. 競技規則の制定

「Official Basketball Rules2012」の発効に伴い、2013 年 4 月より国内で採用する競技規則を一部改定した。

また、「Official Basketball Rules 2014」に基づき、2015 年 4 月 1 日より競技規則を一部変更することを決定した。(24 秒ルール、タイムアウトの制限等)

ミニバスケットボールの競技規則についても 2014 年 4 月 1 日より 30 秒ルール、スローインに関する一部変更を行うことを決定した。

10. 出版物等販売

競技規則、オフィシャルズ・マニュアル等に加え、テクニカル委員会監修の指導者向け DVD を新たに制作、販売した。

11. 施設・用具の認定

ボールや器具の検定申請について、規格等の審査を行った上で認定を行った。

12. 味の素ナショナルトレーニングセンターの施設管理および活用

バスケットボール専用コートについて、日本代表等の合宿利用をはじめ、各チーム、団体、個人の利用調整、管理を行った。

13. 男子トップリーグ

2012 年 6 月に決定した「2013 年新リーグ基本方針について」に基づき、2013 年 9 月に開幕する NBL (National Basketball League) の準備を進めた。2013 年 7 月 1 日に「一般社団法人日本バスケットボールリーグ」が設立され、リーグ運営業務は「新リーグ運営本部」から移管した。

また、「2013 年新リーグ基本方針について」で 2015 年目途とした P リーグについての具体的検討を行い、2016-2017 シーズンからプロリーグを立ち上げること、階層制の

リーグ構造をすることを要旨とした答申を行い、これを具現化するための活動をスタートさせた。

14. 3x3

2013年4月に「3x3推進室」を設置。国内においては、トーナメント大会、日本選手権プレ大会など新規大会を創設、また、国際においては、トライアウトからの日本代表選手の選出、国際大会への派遣の他、クラブ単位のチームが参加するワールドツアーマスターズ（アジア・オセアニア予選）を開催するなど3x3普及に向けての本格的な取り組みを行った。

15. その他

(1) 東日本大震災復興支援事業

原則として全ての全国大会に「東日本大震災復興支援」の冠を付し、大会主管団体の協力のもと、募金活動などを実施した。

(2) 環境活動

関連団体等の協力のもと、各種大会の会場等にPRポスターやバナーの掲出を行い、環境に対する意識向上を図った。

III 組織運営および財務状況

地域との連携強化のため、ブロック連絡会、都道府県協会理事長会議を継続して開催した。オフィスにおいては、国際部を設置し、国際に関する窓口の一本化、常時対応できる体制づくりを行った。

財政面（収支計算書ベース）では、当初予算においては全体収支均衡の予算を組んでいたが、前期決算においてFIBA ASIAカップを主因とする予算比81,000円のマイナスがあったため、これを当期および次期の2年間で補填すべく、期中に50,000千円の収支改善のための削減策、増収策を立て、実行した。この結果、収入面では、助成金や登録料等での収入減があったものの、ウインターカップ、天皇杯・皇后杯での収入増により、ほぼ当初予算通り（303千円増）の1,572,716千円となった。一方、支出面では、主として強化関連支出が大幅に減少した結果、税引き前では当初予算比77,724千円減の1,490,374千円となり、税引き前全体収支は82,342千円のプラスを実現した。しかし、公益目的事業の収支赤字幅が縮小したことにより、課税所得となる収益事業利益が50%しか補填（収支相償）できず課税所得額が増加した結果、法人税等の合計が14,905千円となり、さらに消費税支払いも課税売上、課税仕入れとともに大幅増加したことによる追加支払額11,431千円が発生、税支払額合計額が26,336千円となったことにより、税引き後全体収支は当初予算比51,691千円増の56,006千円となった。これにより、次期繰越金は285,581千円となった。